羊飼いの受難

渡辺 和之（わたなべ かずゆき）
国立民族学博物館外来研究員

森林保全と放牧料

「ここで放牧してはならない。ヒツジは森林の若芽を食べるし、村のウシやヤギの草まで食べてしまう。どうしてもここで放牧するのなら、お金を払ってもらう」

一九九八年三月、東ネパールのナギ村でのことだった。

そう詰め寄られたのは、ルムジャタール村の羊飼いである。彼らは三〇〇頭から五〇〇頭のヒツジを連れて、ヒマラヤ山脈の高山から低地まで季節的に移動する。彼らに自分たちだけの放牧地はない。羊飼いはゆく先々の村で放牧料を支払い、ヒツジを放牧する。

男はナギ村のサムダイの役員と名のった。サムダイとは、ネパール政府が森林保全を目的に、各地で導入した森林利用者組織である。政府は住民に国有林の管理を任せ、森林の保護育成を試みた。これに伴い、ナギ村のサムダイは、村にくる羊飼いから放牧料を徴収しはじめた。彼らが要求した放牧料はよその村と較べて、とてつもなく高いものだった。

「ヒマラヤから平原まで、われわれは四つの郡で放牧している。四つの郡にいくつ村がある？　たった一日放牧するだけなのに、何がお金だ！」

彼らは自分たちの立場を訴えた。しかし、男は規則を盾に一歩も譲らなかった。

「これは私たちが作った規則なのだ。郡の認可も受けている」

結局、羊飼いは男の条件をしぶしぶと飲んだ。草の少ない場所を連日移動したため、ヒツジもかなり弱っていた。

どこへ行っても「金、金、金」

翌日、今度は隣村の男たちが放牧料を徴収しにきた。羊飼いは「あなたたちは郡の認可を受けているのか？　認可がなければ、お金を取る権利はない」と反論した。すると、男たちは黙り込んでしまい、お金も取らずに帰っていった。それでも羊飼いは自らが用いた戦術の効力をまだ疑っていた。「きっとまたお金を取りにやって来るだろう」と。そこで、彼らはもう一日放牧する予定を切り上げ、翌朝早くナギ村を発ったのである。

「どこへ行っても、金、金、金だ。これじゃ、おちおち放牧できない」。羊飼いはいった。

移動する羊飼いにとって、サムダイの導入は新たな受難のはじまりだった。自分たちだけの放牧地をもたず、移動する先々の村で放牧せざるを得ない以上、羊飼いは住民との関係を調整しなければならない。こうしたなかで、彼らは黙って相手に従ったのではない。羊飼いは、規則を盾に、規則以外の話に耳を貸さないサムダイに対し、規則を用いて切り返した。かくして彼らは暫定的ではあるにせよ、森林政策が変化するなかでも、放牧を継続しているのである。その後、ネパールでは治安が悪化した。西ネパールで蜂起したマオイスト（極左ゲリラ）と、その鎮圧をめざす政府との武力闘争は全国展開し、この地域にも拡大した。移動する羊飼いの受難は、まだまだ続きそうである。

ヒツジ
（学名：*Ovis aries*）

ネパールで飼養されるヒツジの多くはバルワール（Baruwal）とよばれる在来種で、山地での移動や森林での放牧など、改良品種では耐えられない環境でも放牧できる。羊毛は粗く太いが、洗うと縮む性質を持ち、フェルトの織物に加工される。老齢やケガで「歩けなくなったヒツジ」は生きたまま仲買人に売られ、肉として都市の市場に送られる。

ヒマラヤ山脈の高山草地。森林保全が叫ばれるたびに、ヒツジやヤギは草地や森林を破壊する元凶に仕立てられる

キャンプで露営する羊飼いたち。彼らは男ばかりで移動しながらヒツジを飼う

ナギ村でサムダイの役員と交渉する羊飼い

移動する羊飼い。彼らは300頭から500頭前後のヒツジを連れて移動する